

令和5年3月19日読書会議事録

令和5年3月23日 桑田幸真

議題：「神の微笑」の第1章、第2章

主催者から：この読書会は親睦を深めるという事が主眼にありますので、皆さん積極的に発言されて下さい。

親様がこの本は哲学書と仰った。意外な印象を受けた。しかし、確かに神とは何かを書いている作品は他にない。目からうろこが落ちた。

僕の神とは大自然だよと答えを先に言うのは先生らしい文学的表現だ。

哲学書としてみると、他の作家の方とは違うというのを改めて感じた。

先生の思想的背景を調べた。1955年に「神と死と富と」を出されている。その本の中に、先生は3歳の時に池に落ちて死にかけた、それ以降、夜が怖い、水が怖いという事があって夜中にうなされて起きるといったことがあったようだ。この幼児体験（臨死体験）が作品に影響を与えていると書かれている。この三歳の時に漁師にはなるなというように運命づけられた。

先日、大江健三郎先生が亡くなったが、作家にはいろいろな書き方があると思う。光治良先生は大変な悲観論者である。これは、生い立ちが影響している。悲観論者が故に、その誠実さが際立っていると思う。立身出世を望まない。外交官にはならず、小作人の貧しさの方に眼を向けられた。

日本人の楽観性を危惧している。

慎重に筆を運ばれる。

この神の微笑は、一つの作品で、ヴェートーベンが作曲するように、1章の主題、2章の主題というように、構成されている。この構成の能力が天才的であると思う。

各章で起承転結を用いて書かれている。

チャクラが開けば、樹の声も聞こえるのではないか。

もう一つの目があれば、見えないものが見えるのではないか。

最後に「もの言わぬ神の意思について書くことにした」これは、決意表明だと思う。これも、起承転結の結だと思う。

私の神とは大自然であると書いてあるが、私たちは大自然が神であると思ったことがあるかと自分に問うた。私たちはいつも大自然に囲まれて生かされている。

天理教では地球を作ったのも、人間を作ったのも親神様と聞かされていたが、芹沢先生の本を読んで、大徳寺様のお話を聞いて改めてそのことについて考えた。

嫁いだ先が天理教の家だった。今、学んでいる教えとは違い、人間が悪い（例えば子どもが熱が出たらあなたが悪いと言われた）とかあなたが悪いと言われた。それに疑問を持っていた。人間の運命を読んで、そうではないと確信できて胸が救われた。この教えに出会って幸せになった。改めて、もっと深く神について学びたい。

節から芽が出るというのは、第三者から言われることではなく、自分で悟ることではないか。

芹沢先生の本を読むことによって、素直にものを考えることの大切さを考える。

中山みきは、神様でも何でも無い、しかし、天理教では中山みきを神様として信仰している。ここに、根本の間違ひがある。

S氏がノートルダム寺院の中にはいあって、敬虔に膝まづいて祈っている人がある。中国の天壇ではひれ伏したい気持ちになった。この態度は、天理教の信者にも言えるのではないか。

親神とは、一つであると芹沢先生は強調されるが、キリスト教の神も、仏教の神も一緒であることを間違えたらいけないと読者に要求されているのではないか。

自分で考えて、自分で学んで、自分でこれが正しいのかを自分で決めることが大切で、自分の行動には責任を持つことが大切だ。一人ひとりの意識で世界を平和にしていくことが大切ではないか。

本当の信仰をしていると幸せになると思う。

神シリーズは聖書であるように感じる。私もプロテスタントとして聖書を勉強してきたが、この本を読んで、一字一句確かめながら読むことが大切だと思った。

芹沢先生の考えで宗教を否定されて神様を信じておられる事が非常に感銘を受ける。天理教の存在は、神様離れが進んでいる時代で大切だとは思う。

光治良先生が衰弱した体の中で、心が変わると元気になる。大自然とは神であるというのを読んで、たくさんの方がこの本を読んで地球が美しくなってほしい。

一人でも多い人に本を読んで頂きたいなら、自分の行動が大切だと思う。

私はローズマリーを可愛がっているが、私の好きな花がいっぱい出てきてくれている。この本を、読んで不思議な感じがする。

人間はいつ何があるかわからない。もしかしたら、私たちも神様の声が聞こえるかも知れない可能性を感じた。もし芹沢先生が、天理教を信仰したらどうだったんだろう。

7年前に楓の樹が、話しかけてきた。実証主義者として自宅の泰山木に声をかけた。Ñ子爵邸の櫛に話しかけられた。死の扉を前に書かれた後に、櫛から私について書いて下さいと言われた。200枚の原稿を書いていた。Sさんに問われた事を答えずにあの世にやってしまった事で、神について書かなければいけないと思ったのではないか。スイスの療養時に瞑想をした時が原点ではないか。瞑想による修行することにおいて私たちも声が聞こえるようになるのではないか。

「汝の考えている神～汝は考えているな。そうだ、この神のほかに神はないぞ。どうしてこの神について書かないのか」に感銘を受けた。親様も大自然が神と仰っている。童謡にも空とか、風とかが出て来るが心が穏やかになる。大自然には癒す力があると思う。

10年前にもこの本を読んだが、今読むとまったく印象が違う。神と人間との関係。大自然と人間との関係。私もいつかは大自然と話をしたい。

私は目が見えないので、聞かせて頂いて心がほっこりとして、今までの霧のようなものが晴れていく気分だ。生きていくことに感謝している。生きていていいんだと感謝の思いだ。

人間の運命を40年前に読んで、この前読んだら全然違う印象を覚えた。

なんと、私たちは幸せな時代に生きているのだろう。こうして真面目な読書会に参加できて嬉しい。亡くなられて随分なるのにこんなに真面目な読書会が行われることは芹沢先生の偉大さを感じる。

要望として、今日のまとめと、次に対する課題を示して頂けたらありがたい。

次回は、代表の方からまとめをさせていただきます。

代表者感想：第2回目ということもあり、参加者は何かを求めている方に絞られて来たかなと、思っています。みなさん揃って、「参加して良かった」と言われていました。これ以上のご褒美はありません。今後とも細く長く続けてまいります。